

レポート



## ケンブリッジ大学継続教育研究教育センター訪問記

東北大学名誉教授・広島経済大学名誉教授  
箱木 眞澄

### はじめに

この夏、ポルトガルのポルト大学で開かれた国際政治経済学会に参加したのち、8月21日から29日までイギリスを訪問して、大学開放の実地を見学した。イギリスにはハーバート大学に留学していたときに親しくなった友人ブルック・ホロヴィッツ氏 (Mr. Brook Horowitz) がいて、彼と会うのが楽しみであった。この話を香川教授にしたところ、イギリスへ行くのならば三つのことをお願いしたい。第1は、スチュアートの肖像画がマディングリー・ホール階段にかかっている。UEJのホームページに掲載する予定なので、この写真を自分で撮り、掲載許可をもらって欲しいということであった。第2は、香川教授が40年にわたって整理してきたイギリス大学拡張雑誌の総合的書誌目録をケンブリッジ大学出版部で出版することが可能かどうかを打診して欲しい。第3は、香川教授のケンブリッジ大学拡張資料の中で欠損した部分のコピーを取得して欲しいというお願いであった。

このお願いを聞いて簡単に引き受けたが、私の専門は国際経済学であるので、イギリスの大学開放について事前に少し勉強して渡欧し、ケンブリッジ大学へ行くことになった。事前にメールを送信し連絡を取って本丸のマディングリー・ホールを訪ねることになったのだが、本稿はその報告である。

### 1. ケンブリッジ大学訪問

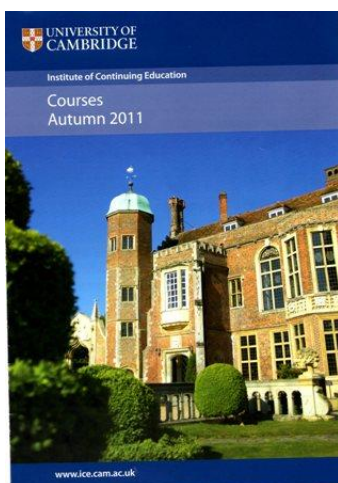
イギリス滞在8日間のうち、最初の5日間はケンブリッジ訪問に使った。3日間を昔懐かしのアールズコート地域 (ロンドン市内、筆者の最初の訪英時に宿泊した地域) のホテルを根城にして、ケンブリッジを毎日 (日本出発前にブリティッシュ・レイルパスを購入していたため、いちいち切符を購入する必要はなかった) 訪問し、残りの2日間をケンブリッジ大学のセルウィン・カレッジの学寮に宿泊してケンブリッジ大学を全体としてじっくり観察できたのは幸いであった。セルウィン・カレッジに宿泊したのは、親友ホロヴィッツ氏の手配であった。彼の出身校なのである。

さて今回のケンブリッジ訪問の眼目は、香川教授の依頼を受けて、マディングリー・ホールへ行き、そこにあるスチュアートの肖像画の使用許可をもらうこと、資料の欠頁を補填すること、それに大学出版部と共同出版の可能性を開くことであった。マディングリー・ホールは、ケンブリッジ大学の継続教育研究教育センター (University's Institute of Continuing Education) である。このホールは地理的にはケンブリッジの西端 (ケンブリッジから西へ3マイル) にあり、地図にも載っていないので、場所を特定するのに往生した。それでもやっと訪ねたところ、所長で週末講座担当のレベッカ・リングウッド博士 (Dr Rebecca Lingwood) が不在であったため、公共・専門職

プログラム担当部長のアイアン・バックスター博士(Dr Ian Baxter)とお会いした。バックスター博士はケンブリッジで博士号をとって後、グラスゴウ大学で十年ほど勤務しケンブリッジに戻ってきたとのことで、これから筆者がグラスゴウへ行く予定であることを知って話が弾んだのである。同博士は、施設を案内し、こちらの質問に親切に対応し、たくさんの資料を提供して下さった。

この施設は、もとジョン・ハインド(John Hynde)という貴族の庄園の館で、1540年代の末に作られた館である。ハインド家はこの館を428年間所有し、次いでヘンリ・ハレル氏に移り、最後に紡績業の企業家ハーディング家が所有していたが、1948年5月にケンブリッジ大学が、館と小教区地区を購入したものである。建物は中世以来の美しい建築物であるが、しばしば手を入れて拡張され、所有権が大学に移ってからは宿泊棟も設けられた。また、ホールにはスチュアート・ルームという暖炉つきの部屋もあり、ここは教室兼図書室となっていた。館の四囲の景観は素晴らしく、一望千里の草原と地方随一の整った庭園はイギリスの田園風景の典型ともいふべきところであった。

それでは、私に課せられた仕事について、簡単に結果を報告しておく。第1の課題はスチュアートの肖像画を撮影し、UEJのホームページに掲載することについての許可を頂くことであった。肖像画は大きなもので、元は国立美術館にあった。所有権はスチュアートの出身校であるトリニティ・カレッジにあるが、現在はこのホールに飾ってあった。写真はハレーションのために人に見せられるほどには撮影できなかった。私たちのホームページに掲載する件については、レベッカ博士から、どうぞどうぞ、というメールが入っていた。



ケンブリッジ大学



アイアン・バックスター博士

第3の課題は、『大学拡張ジャーナル』(University Extension Journal)の欠頁を数枚補足するため、現物を見て複写することになったが、大学拡張の第一次資料の中に残念ながら求める資料は所蔵されていなかった。同誌には旧と新があり、旧シリーズ(1890-95)は見付からず、存在していたのはオックスフォード大学との共同でその後発行された新シリーズ(1895-1904)だけであった。旧シリーズは、グラスゴウ大学(同大学のウェブサイトでのみ検索可能、しかも同大学関係者のみ)とロンドン大学等には存在することが分かったのであるが、今回の訪英期間内での処理は時間的にできなかった。

第2の課題は、マディングリー・ホールとは関係がなく、大学出版部を訪ねて交渉することであった。これはケンブリッジ大学の卒業生であるブルック・ホロヴィッツと一緒に訪問することを予定していたことで、あいにくこの時はホロヴィッツ氏との間で時間の調整ができなくて、

ケンブリッジ大学出版部を訪問することはできず、メールでのやり取りで終わった。出版計画に関しては、共同で出版するといのは難しいということであったので、ここからは香川教授に直接コンタクトをとってもらわなければならないということになった。

以上が、依頼事項に対する私の報告である。あまり成果がない結果に終わったが、何らかの課題をもって訪ねているので、普通に視察するのとはまた違った視点でマディングリー・ホールを見ることができた。

## 2. 継続教育研究教育センターの活動

中世以来の伝統のあるマディングリー・ホールとその周辺の地域は、1948年にケンブリッジ大学が購入した。大学が購入してから、1951年になってこの館はホールとなり、当初は大学院生と客員研究者の宿舎として利用されたが、休暇中は短期講座を受講する成人受講生の宿舎として活用された。1975年に大学の構外教育部は、ここを宿泊制成人教育の施設にし、同部もここに落ち着くことになった。2002年に構外教育部 (Board of Extra-Mural Studies) が継続教育センター

(Institute of Continuing Education) に改められ、ケンブリッジ大学の大学開放の全体を統括し各種講座を提供する拠点となっている。センターは、あらゆる年代の成人学習者に、ケンブリッジの専門家が講義をする何百というパートタイム制の講座を開き、年間 8 千人以上の受講生が利用している。

バクスター博士による説明もあったが、いただいた資料「2011年秋学期の講座」パンフレットに基づいて、どのような講座をここで開いているか紹介しておこう。講座事業は、4種類ある。

第 1 は、修了証及びディプローマに至る講座である。この講座は学部レベルの修了証 (certificate)、ディプローマ及び上級ディプローマ、及び大学院修士学位につながる講座で、大学の規則に基づいて単位を取得することができる講座である。これらの講座は、たいてい週 1 回 2 時間の講義や指導で一年間継続して開かれるセッションル講座である。学部レベルの修了証に至る講座のうち、いくつかを引いておく。

「考古学」、水曜日、午後 7 時 15 分始め、2011 年 10 月 4 日始め、費用 1200 ポンド、  
レベル4で 60 ポイント、1 年間。講師はジリー・カー博士。

「天文学」、月曜日、午後 7 時 15 分始め、2011 年 10 月 3 日始め、費用 1200 ポンド、  
レベル4で 60 ポイント、1 年間。講師はマーガレット・ペンストン博士。

「コーチング」、2 日間のワークショップ+オンライン学習、2011 年 10 月 3 日始め、費用 2550 ポンド、  
レベル4で 60 ポイント、1 年間。講師はケイス・ネルソン。

「英文学」、水曜日、7 時 15 分始め、2011 年 10 月 5 日始め、費用 1200 ポンド、  
レベル4で 60 ポイント、1 年間。講師はエルザベス・モア博士。

「遺伝学」、水曜日、午後 7 時 15 分始め、2011 年 10 月 5 日始め、費用 1200 ポンド、  
レベル4で 60 ポイント、1 年間。講師未定。

「歴史環境」、水曜日、午後 7 時 15 分始め、2011 年 10 月 4 日始め、  
レベル4で 60 ポイント、1 年間。講師はスーザン・オーシュイゼン博士。

「美術史」、火曜日、午後 7 時 15 分始め、2011 年 10 月 4 日始め、  
レベル4で 60 ポイント、1 年間。講師はフランシス・ウッドマン博士。

「国際開発」、水曜日、6 時半始め、2011 年 10 月 5 日始め、  
レベル4で 60 ポイント、1 年間。講師はマイク・シューアル博士。

「評価の原理と実践」、6 日間土曜日に集中講義＋オンライン学習、

レベル4で 60 ポイント、2011 年 10 月 3 日、費用 2355 ポンド、1 年間。担当はジル・グリムショー。

「歴史的建造物保存の高等教育」、月曜日、7 時 15 分始め、2011 年 10 月 3 日始め、

費用 2400 ポンド、2 年間継続。講師はロバート・パーキンソン。

大学院修士学位というのは、マスター・オブ・スタディズ (MSt) と書いてあるので、学術修士とも訳すべきかと思うが、講座としては、「上級教授法」、「応用犯罪学と警察行政」、「建築史」、「建築技法」、「歴史的景観」、「国際関係論」、「地方史」、「ユダヤ教徒とキリスト教徒の関係に関する研究」等 11 が挙げられている。

第 2 は、マディングリー・ホールでの週末講座である。金曜日の夜から日曜日の昼食までの時間に年間を通じて 150 講座以上が開かれている。講座は宿泊制で行われるが、通いも可能とされている。科目の領域でいえば、「考古学と古代世界」、「芸術、建築と装飾芸術」、「歴史」、「景観と地方史」、「言語」、「文学、独創的叙述法、劇場と映画」、「音楽」、「哲学と心理学」「科学」という 9 つに分かれ、そのなかにかくつもの講座名が記載されている。ひとつの例として、「歴史」の週末講座を紹介しておく。

「ウィリアムズ・メアリ・アンの統治時代、1688-1714 年」、

2011 年 9 月 9 日開始、料金 宿泊者は 350 ポンド、通い者は 240 ポンド、

「戦時中のイギリス映画にみる宣伝の実態」、2011 年 10 月 21 日始め、料金は同上。

「銃後の生活、1939-45 年」、2011 年 11 月 4 日始め、料金は同上。

「ソ連とロシアの諜報活動、戦争か平和か」、2011 年 11 月 4 日始め、料金は同上。

「年金と退職の文化史」、2011 年 11 月 11 日始め、料金は同上。

また、自活している社会人のための奨学金も 3 つほど提供されている。

・ローズ・フッド記念奨学金、500 ポンド

初めて大学レベルの学習をしようとする 22 才以上の人が対象

・ジェイムズ・スチュアート奨学金、200 ポンド

初めて、継続教育センターで学習しようとする人が対象

・ケンブリッジ大学出版部奨学金、200 ポンド

国立学校及び国の基金で作られた継続教育機関の教員が対象。

以上が、ケンブリッジの継続教育研究教育センターの講座事業である。私自身には、これらの講座名が日本で開かれている講座と比較するすべがないが、週末講座とか大学院講座など、レベルが明示してあるのはよほど基準がしっかりしているからであろうと思われた。

ここでは、ケンブリッジ大学の社会人向け開放講座を紹介した。香川教授の依頼がきっかけでイギリスの大学開放についても関心が広がって、ケンブリッジの次にはスコットランドのエディンバラ大学とグラスゴー大学を見て回った。特にグラスゴー大学では、成人・継続教育で提供される講座も見た。ここでも単位を積み上げて修了証にしていく講座が多く見られた。紙幅の都合上、詳しいことを報告できないのが残念であるが、概して、ケンブリッジでもそうであるが、長い歴史の中で、大学が人々の学習に奉仕するという態度がイギリスの大学ではぐくまれていると思う。

## おわりに

最後に、私たちの全日本大学開放推進機構と同じような活動をしている生涯学習大学連合 (The Universities Association for Lifelong Learning, 略称 UALL) のことについても言及しておきたい。この団体は、「高等教育の[分野]内で行われる生涯学習の振興と進歩のため、知識と技能に民主的にアクセスできるようにし、国民の経済的文化的生活に寄与すること」を目的とし、この目的を実現するために、高等教育で生涯学習の開発、情報交換、優れた実践の普及を行ったり、生涯学習の全分野に高い基準を持つように奨励することなどを行っている団体である。私たちとしては国際的な連携を検討しているので、この団体と連携の協議の下準備をすることも考えていた。生涯学習大学連合へのアクセスは、ケンブリッジのレベッカ・リングウッド博士のご教示によるもので、同連合のルーシー・ベイト (Ms Lucy Bate) 女史と連絡を取ったが、同女史からの返事が行き違いになり、お訪ねすることができなかった。後から見たメールでは、日本大学開放推進機構との連携も意欲的に伺え、せっかく UALL が予定してくれていたレスター在住の大学教授との面談を逃してしまったのは残念であった。

今回の短期間のイギリス大学開放の現地調査は、経済学を専攻する私にとっても大いに啓発される側面があった。朝倉祝治、藤村好美、近藤真司、香川正弘の本機構会員は、平成 13 年に文科省の委託研究でイギリスの大学開放センターをすでに現地調査された経験を持っておられる。全日本大学開放推進機構でも、こうした研修ツアーを組む日があれば、積極的に協力したいと思っている。

## 参考文献

University of Cambridge. Institute of Continuing Education, *Madingley Weekly Programme: Short Courses January-June 2012*.

-----, *Part-time Certificate and Diploma Courses 2011-12*.

-----, *Madingley Hall Guide*. Cambridge: Institute of Continuing Education, 2008.

-----, *Courses Autumn 2011*.

University of Glasgow. *Courses for Adults 2011-2012*. Glasgow: University of Glasgow.DACE, [2011].

香川正弘「イギリスにおける大学継続教育の運営」『生涯学習の促進に関する研究開発報告書』文部科学省、2002 年 3 月、95-106 頁。

---

箱木 真澄 (はこぎ ますみ)

1936 年、兵庫県神戸市生まれ。兵庫県三田学園高等部卒業、大阪外国語大学卒業、大阪大学大学院経済学研究科博士課程単位取得満期退学。1972 年福島大学経済学部助教授、教授を経て、1995 年東北大学大学院国際文化研究科教授。2001 年同大学院大学教授退官、広島経済大学国際地域経済学科教授、2011 年同教授退職。東北大学名誉教授、広島経済大学名誉教授。1986-87 年ハーバート大学ロシア研究センター訪問研究員、同フェロー、1987 年カールトン大学ソ連東欧研究所訪問研究員、1995 年ハンガリー・ブダペスト世界経済研究所。J. Berliner, H.G.J. Kosta, and M.Hakogi, eds., *Economics of the Socialist Countries*, Maruzen, 1988; 箱木真澄・香川敏幸監訳『コメコンソ連・東欧諸国の選択』文真堂、1990 年、他。全日本大学開放推進機構会員。